総合研究大学院大学文化科学研究科開設二〇周年記念
文化科学研究科　学術交流フォーラム
「極限の文化
―人はどこで生きているか　生きられるか―」
二〇〇九・一〇・一八（日）於国立民族学博物館

転換期の文学
―鴨長明と後鳥羽院の営みから―

日本文学研究専攻　寺島恒世

鴨長明

1　略年譜

		年齢
久寿二年	（一一五五）	1
承安三年	（一一七三）頃	19
治承四年	（一一八〇）	26
養和元年	（一一八一）	27
寿永二年	（一一八三）	29
元暦二年	（一一八五）	31
正治二年	（一二〇〇）	46
建仁元年	（一二〇一）	48
元久元年	（一二〇四）	50
承元二年	（一二〇八）	54
建暦二年	（一二一二）	58
建保四年	（一二一六）	62

誕生。賀茂御祖神社（下鴨）禰宜長継の次男。
父長継没。
都大火・大風、福原遷都。
全国大飢饉。
平家都落ち。
平家滅亡・都大地震。
後鳥羽院歌壇登場。
和歌所寄人。
出家。大原にこもる。
日野に方丈の庵を結ぶ。
方丈記。
没。

2　『方丈記』本文（抄）

一ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、二かつ消えかつ結びて、久しくとゞまりたるためしなし。世中にある人と栖と、又かくのごとし。四たましきの都のうちに、棟を並べ、甍を争へる、高き卑しき人のすまひは、世々を経て尽きせぬ物なれど、是をまことかと尋ぬれば、昔しありし家はまれなり。或は去年焼けて今年作れり。或は大家滅びて小家となる。住む人も是に同じ。所もかはらず、人も多かれど、古見し人は二三十人が中に、わづかに一人二人なり。

一　文選・歎逝賦による（十訓抄）など、諸説がある。参8
二　水の上に浮ぶあわ。泡沫。
三　一方では。
四　玉を敷いたように美しりっぱな意。宮中の庭などというところから、枕詞のように用いた。
五　屋根の瓦。「争ふ」はその棟や瓦の高さを競っている意。
六　近世の木版本では「ア→ル」とよむ。

朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。不知、生れ死ぬる人、いづかたより来りて、いづかたへか去る。又不知、仮の宿り、誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主とすみかと、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。或は露落ちて花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或は花しぼみて露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つ事なし。

予ものの心を知れりしより、四十余りの春秋を送れる間に、世の不思議を見る事、やゝ度々になりぬ。

（以下、五大災厄―大火・大風・遷都・飢饉・地震―）

五わが身、六父方の祖母の家を伝へて、久しく彼の七所に住む。其後縁欠けて身おとろへ、しのぶかたくしげかりしかど、つひに屋とゞむる事を得ず。三十余りにして、更にわが心と一の庵をむすぶ。是をありしすまひにならぶるに、十分が一也。居屋ばかりをかまへて、はかゞしく屋を作るに及ばず。わづかに築地を築けりといへども、門を建つるたつきなし。竹を柱として、車を宿せり。雪降り風吹くごとに、あやふからずしもあらず。所、河原近ければ、水難も深く、白波のおそれも騒がし。すべてあられぬ世を念じ過ぐしつゝ、心を悩ませる事、三十余年也。其間折々のたがひめ、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち、五十の春を迎へて、家を出て世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官禄あらず、何に付けてか執をとゞめん。むなしく大原山の雲にふして、又五かへりの春秋をなん経にける。

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りをむすべる事あり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蚕の繭を営むがごとし。是を中ごろのすみかに並ぶれば、又百分が一に及ばず。とかくいふほどに、齢は歳々に高く、すみかは折々に狭し。その家のありさま、世の常にも似ず、広さはわづかに方丈、高さは七尺がうち也。所を思ひ定めざるが故に、地を占めて作らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、継目ごとにかけがねをかけたり。若し心にかなはぬ事あらば、やすく外へ移さむがためなり。その改め作る事、いくばくの煩ひかある。

（方丈の住まいの賛美）

一「うたかたは、かつ消えかつ結びて」に対応。同時に命短くはかない気持を含める。→補二
二　倒置法。「生れ死ぬる人…いづかたへか去る（ということ）を知らず」の意。
三　ほんの一時の宿のような現世の住居。仏教では生死を繰り返し流転してゆくと考え、この世はその中のかりそめの一時であるとする。
四　朝顔の花と花の上に置く露。→補三
五　思いもかけぬ事。次の大火、大風、遷都、飢饉、地震。
六　祖父季継の妻。季継は崇徳院の代の人で、禰宜歟、正四位上であった（鴨県主系図）。
七　その住所。
八　祖母の家と縁がきれて。
九　思い出などがあれこれ多かった。→補四
一〇　底本「ヤトヽムル」。「宿とむる」とも解される。諸本「跡とむる」。
一一　文治元―五年（一一八五―一一八九）、建久元―四年（一一九〇―一一九三）ごろか。
一二　住むための家。住居。居宅。住居中心で付属の建物などのないことをいう。
一三　手段。方法。便り。ここは門を建てるゆとり（費用）がない、くらいの意。
一四　車を入れた。車宿りとした。
一五　水難から白波を出し、盗賊のおそれ、心配をいう。
一六　不本意なこと。意に反すること。諸本「たがひめに」の方が通じやすい。
一七　元久元年（一二〇四）ごろ。
一八　比叡山の麓。山城国愛宕郡八瀬村（京都市左京区）以北の山。大原の辺。

夫、一三界は只心一つなり。心若しやすからずは、二四象馬、七珍もよしなく、宮殿、楼閣も望みなし。今さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。五おのづから都に出でて、身の乞匄となれる事を恥づといへども、帰りてこゝに居る時は、他の俗塵に馳する事をあはれむ。若し人このいへる事を疑はば、魚と鳥とのありさまを見よ。八魚は水にあかず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざれば其の心を知らず。閑居の気味も又同じ。住まずして誰かさとらむ。

抑一〇一期の月かげ傾きて、一一余算の山の端に近し。たちまちに三途のやみに向はんとす。何の業をか一三こたむとする。仏の教へ給ふ趣は、事にふれて執心なかれとなり。今草庵を愛するも、一四閑寂に着するも、一五障りなるべし。いかゞ要なき楽しみを述べて、一六あたら時を過ぐさむ。しづかなる暁、このことわりを思ひ続けて、みづから心に問ひていはく、世をのがれて山林にまじはるは、心ををさめて道を行はむとなり。しかるを、汝姿は聖人にて、心は濁りに染めり。一七栖はすなはち、一八浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつところは、わづかに一九周利槃特が行ひにだに及ばず。二〇若しこれ貧賤の報のみづから悩ますか、二一はた又妄心のいたりて狂せるか。その時、心更に答ふる事なし。只二二かたはらに二三舌根をやとひて、二四不請阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ。

于時二五建暦の二年、二六弥生の晦日ごろ、二七桑門の二八蓮胤、二九外山の三〇庵にして、これをしるす。

方丈記

一　晩年の住居。
二　池亭記。→補一6
三　三十歳余で作った鴨川近くの家。
四　並べてみる。対比する。
五　一丈（約三メートル）四方。
六　材木の土台。
七　「打覆」。上を覆っただけの簡単な屋根。
八　→補五
九　趣。様子。「キミ」とも。
一〇　一生。一生を夜の月にたとえたもの。月が西に傾くように、自分も老い衰えて。
一一　残っている寿命。余命。
一二　死者が悪因によって赴く三つの暗黒世界。火途（火熱の苦を受ける）、刀途（刀剣の責苦）、血途（互に食い合う）。
一三　不平やぐちを言う。人のせいにして弁解する。
一四　ある事にひかれて離れられないこと。愛着、願望。
一五　底本「サハカリ」は「さばかり」で、それだけのことであろうの意となるが、諸本によって改めた。
一六　延べて（延ばして）とする解もある。
一七　この次に、一条兼良本等に別掲の文がある。→補五
一八　三界唯一心。三界のあらゆる事物は心から起る意。三界は一切の衆生の生死する三種の世界（欲界、色界、無色界）、人間の全世界。華厳経の三界唯心より出る。
一九　象と馬。インドで乗用等として貴重な家畜。七珍とあわせて、大切な宝物。
二〇　たまたま。偶然。
二一　乞食。
二二　俗世間のわずらわしい事に奔走する、あくせくする。

〔市古貞次校注『新訂方丈記』（岩波文庫）による。〕

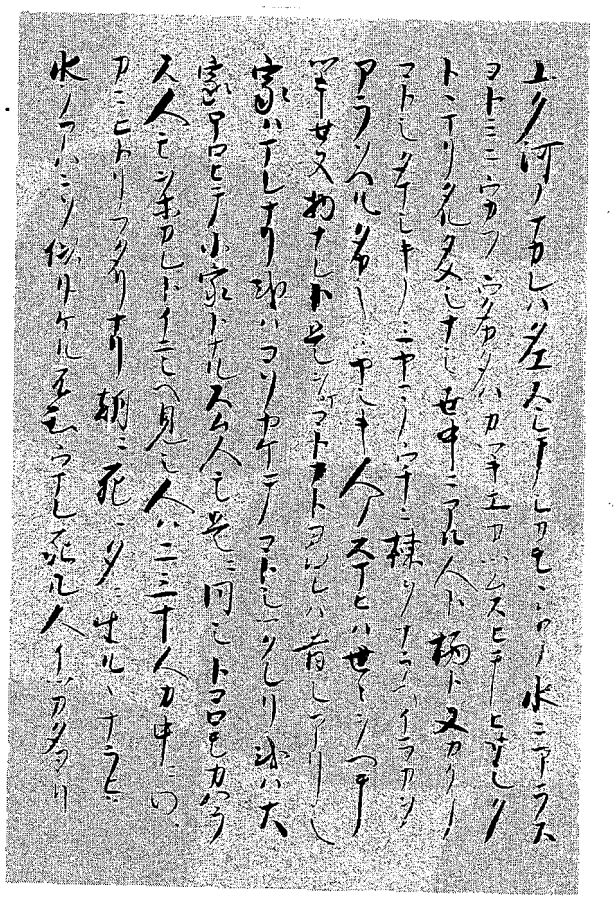
3 慶滋保胤『池亭記』

375 池亭記　　慶保胤

予二十余年以来、歴見東西二京、西京人家漸稀、殆幾幽墟矣。人者有レ去無レ来、屋者有レ壊無レ造。其無レ処移徙、無レ憚賤貧者是居。或楽幽隠亡命、当入レ山帰レ田者不レ去。若自蓄財貨、有レ心奔営者、雖一日不レ得レ住之。往年有一東閣、華堂朱戸、竹樹泉石、誠是象外之勝地也。主人有レ事左転、屋舎有レ火自焼。其門客之居近地者数十家、相率而去。其後主人雖レ帰、而不重修。子孫雖レ多、而不永住。荊棘鎖レ門、狐狸安レ穴。夫如レ此者、天之亡西京、非人之罪明也。東京四条以北、乾艮二方、人人無貴賤、多所群聚也。高家比門連堂、小屋隔レ壁接レ簷。東隣有火災、西隣不レ免余炎、南宅有盗賊、北宅難レ避流矢。南阮貧、北阮富。富者未必有レ徳、貧者亦猶有レ恥。又近勢家容微身者、屋雖レ破不レ得レ葺、垣雖レ壊不レ得レ築。有レ楽不レ能大開レ口而咲、有レ哀不レ能高揚レ声而哭。進退有レ懼、心神不レ安。譬猶鳥雀之近鷹鸇矣。何況転広門戸、初置第宅。小屋相并、小人相訴者多矣。宛如子孫去父母之国、仙官謫人世之塵。其尤甚者、或至以狭土滅一家愚民。或下東河之畔、若遇大水、与魚鼈為レ伍、或住北野之中、若有苦旱、雖渇乏無レ水。彼両京之中、無空閑之地歟。何其人心之強甚乎。且夫河辺野外、非啻比レ屋比レ戸、兼復為レ田為レ畠。老圃永得レ地以開レ畝、老農便堰レ河以漑レ田。比年有レ水、流溢隄絶。防河之官、昨日称其功、今日任其破。洛陽城人、殆可レ為魚歟。竊見格文、鴨河西、唯免レ耕崇親院田、自余皆悉禁断。以レ有水害也。加以東河北野、四郊之二也。天子迎レ時之場、遊幸之地也。有人縦欲レ居欲レ耕、有司何不レ禁不レ制乎。若謂庶人之遊戯者、夏天納涼之客、已無下漁小鮎之涯、秋風遊猟之士、又無下臂小鷹之野。夫京外時争住、京内日陵遲。彼坊城南面、荒蕪眇々、秀麦離々。去膏腴就塊埆、是天之令然歟、将人之自狂歟。予本無居処、寄居上東門之人家。常思損益、不レ要永住。縦求不レ可レ得之。其価直二三畝千万銭乎。予六条以北、初卜荒地、築四垣開一門。上択蕭相国窮僻之地、下慕仲長統清曠之居。地方都盧十有余畝。就レ隆為小山、遇レ窪穿小池。池西置小堂、安弥陀。池東開小閣、納書籍。池北起低屋、着妻子。凡屋舎十之四、池水九之三、菜園八之二、芹田七之一。其外緑松島、白沙汀、紅鯉白鷺、小橋小船、平生所レ好、尽在於中。況乎春有東岸之柳、細煙嫋嫋。夏有北戸之竹、清風颯然。秋有西窓之月、可以披書。冬有南簷之日、可以炙背。予行年漸垂五旬、適有小宅。蝸安其舎、虱楽其縫。鷃住小枝、不望鄧林之大、蛙在曲井、不知滄海之寛。家主、職雖在柱下、心如住山中。官爵者任運命、天之工均矣。寿夭者付乾坤、丘之禱久焉。不楽人之為風鵬、不楽人之為霧豹、不要屈膝折腰、而求媚於王侯将相、又不要避言避色、而刊蹤於深山幽谷。在朝身暫随主事、在家心永帰仏那。予出有青草之袍、位雖卑職尚貴、入有白紵之被、暄於春潔於雪。盥漱之初、参西堂、念弥陀、読法華。飯飡之後、入東閣、開書巻、逢古賢。夫漢文皇帝為異代之主、以好倹約安人民也。唐白楽天為異代之師、以長詩句帰仏法也。晋朝七賢為異代之友、以身在朝志在隠也。予遇賢主、遇賢師、遇賢友。一日有三遇、一生為三楽。近代人世之事、無一可恋。人之為師者、先貴先富、不以文次。不如無師。人之為友者、以勢以利、不以淡交。不如無友。予杜門閉戸、独吟独詠。若有余興者、与児童乗小船、叩舷鼓棹。若有余暇者、呼僮僕入後園、以糞以灌。我愛吾宅、不知其他。応和以来、世人好起豊屋峻宇、殆至山節藻梲。其費且巨千万、其住纔二三年。古人云、造者不居。誠哉斯言。予及暮齒、開起小宅。取諸身量于分、誠奢盛也。上畏于天、下愧于人。亦猶下行人之造旅宿、老蚕之成独繭矣。其住幾時乎。嗟乎、聖賢之造家也、不費民、不労鬼。以仁義為棟梁、以礼法為柱礎、以道徳為門戸、以慈愛為垣墻、以好倹為家事、以積善為家資。居其中者、火不能焼、風不能倒、妖不得呈、災不得来、鬼神不可窺、盗賊不可犯。其家自富、其主是寿。官位永保、子孫相承。可不慎乎。天元五載孟冬十月、家主保胤、自作自書。

本朝文粋　巻第十二

4 大福光寺本『方丈記』



ユク河ノナカレハタエスシテシカモ、トノ水ニアラス
ヨトミニウカフウタカタハカツキエカツムスヒテヒサシク
ト、マリタルタメシナシ世中ニアル人ト栖ト又カクノ
コトシタマシキノミヤコノウチニ棟ヲナラヘイラカヲ
アラソヘルタカキ□ヤシキ人ノスマヒハ世ヒヲヘテ
ツキセヌ物ナレト是ヲ。コトカト尋レハ昔シアリシ
家ハマレナリ或ハコソヤケテコトシツクレリ或ハ大
家ホロヒテ小家トナルスム人モ是ニ同シトコロモカハラ
ス人モヲホカレトイニシヘ見シ人ハ二三十人カ中ニワツ
カニヒトリフタリナリ朝ニ死ニ夕ニ生ル、ナラヒ□
水ノアハニソ似リケル不知ウマレ死ル人イツカタヨリ

後鳥羽院

1 略年譜

	年齢	
治承四年（一一八〇）	1	誕生。高倉天皇第四皇子。
元暦元年（一一八四）	5	即位。第八二代天皇。
建久九年（一一九八）	19	土御門天皇に譲位し、上皇になる。
正治二年（一二〇〇）	21	本格的な和歌活動開始。
建仁元年（一二〇一）	22	和歌所設置。
元久二年（一二〇五）	26	新古今和歌集竟宴。
承元元年（一二〇七）	28	最勝四天王院障子和歌の主催。
承久三年（一二二一）	42	執権北条義時追討の院宣を下す（承久の乱）。院方敗北、隠岐配流。
嘉禎元年（一二三五）	56	遠島百首の改訂。百人一首成立。
延応元年（一二三九）	60	崩御。

2 遠島における活動

ア 和歌関係（活動）

新古今和歌集の精選。

遠島百首の詠出と改作。

後鳥羽院自歌合の結番、及び藤原家隆に加判依頼〔嘉禄二年（一二二六）〕。

遠島歌合の主催（嘉禎二年（一二三六））。詠歌と結番・判定。

定家家隆両卿撰歌合の作成（定家と家隆の秀歌五十首の選定・結番）。

詠五百首和歌の詠出。

隠岐本新古今和歌集の完成（約二千首を約千六百首に）。

イ 仏教関係（資料）

無常講式

東寺仏舎利相承次第

法然上人行状絵図所載書状

宸翰類

3 詠五百首和歌について

（構成　春百首・夏五十首・秋百首・冬五十首・恋百首・雑百首）

1063 我思ひ積もり〳〵てあらたまの年をあまたも嘆きこしかな

1064 いつとなき小倉の里に心あれや暮れぬといそぐ山の端の月

1065 久かたの空もあはれとてらさなん仰ぐかひなく年のへぬれば

1066 いとゞしく物思ふ宿の道芝に露置きそふる夜半のむら雨

1067 奥山の岩根にたゝむ苔むしろたが敷き捨てし名残なるらん

1068 嘆きあまりいくよの年をせめぎけん夢のうちなる夢を見しまに

1069 水草ゐて月さへすまぬふるさとの岩もる清水けふやくまましへ

1070 老にけるすがたの池のうきぬなは苦しき世をぞ思ひわびぬる

1071 かさゆひの島こぎわかれこぐ舟のあと行く波のあはれ世の中

1072 花の色鳥の声にもなぐさまずうき世を悟る仮の宿りは

1073 くやしくぞあだのすさみに年をへて仏の道に猶やたどらん

1074 そむけどもかごとばかりの苔の袖心をそむる墨染めぞなき

1075 まことには仏の国もよそならず迷ふかぎりぞうき世とも見る

1063 本歌「…白雪の　積もり積もりて　あらたまの　年をあまたも　過ぐしつるかな」（古今・雑体・躬恒）。〇あらたまの―「年」の枕詞。▽古今集の長歌の一部をそのまま借り用いた。後鳥羽院の歌にまま見られる摂取。

1064 本歌「いつとなき小倉の山のかげを見て暮れぬと人の急ぐなるかな」（新古今・雑中・道命）。〇いつとなき―いつということもなく。〇小倉の里―山城国の歌枕。「を暗（し）」を掛ける。〇心あれや―配慮してくれてよいではないか。

1065 〇久かたの―「空」の枕詞。▽王者としての立場から天に祈る後鳥羽院らしい歌。

1066 参考「いとどしく物思ふ宿の荻の葉に秋と告げつる風のわびしき」（後撰・秋上・読人不知）。「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露置き添ふる雲の上人」（源氏物語・桐壺・桐壺更衣の母君）。〇置きそふる―添えて置く。流す涙に添えることを言う。

1067 参考「奥山の岩根が上の苔むしろ立ちゐる雲の跡だにもなし」（堀河百首・苔・基俊）。「白雲の立ちゐる山の苔むしろわれが片敷く衣とぞ思ふ」（同・永縁）。〇苔むしろ―旅人や隠者などが敷く粗末な敷物。▽苔を文字通りに「苔むしろ」と見立てる。

1068 参考「老いぬとてなどか我が身をせめぎけむ老いずは今日にあはましものか」（古今・雑上・敏行）。「旅の世にまた旅寝して草枕夢のうちにも夢を見るかな」（千載・羇旅・慈円）。〇せめぎけん―（わが身を）せめたててきたのだろう。

1069 本歌「ふるさとの板井の清水水草ゐて月さへ澄まずなりにけるかな」（千載・雑上・俊恵）。「夏の夜の月待つほどの手すさみに岩漏る清水いく結びしつ」（金葉・夏・基俊）。

1070 参考「恋をのみすがたの池に水草ゐてすまでやみなむ名こそ惜しけれ」（千載・恋四・待賢門院安芸）。「いかなければ知らぬに生ふるうきぬなは苦しや心人知れずのみ」（後拾遺・恋一・馬内侍）。〇すがたの池―大和国の歌枕。「姿」を掛ける。〇うきぬなは―水に葉を浮かせている蓴菜。「憂き」を掛け、採取のために「繰る」ことから「苦し」を導く。

1071 参考「しはつ山うち出でて見ればかさゆひの島こぎかくるたなし小舟」（古今・大歌所御歌）。「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟の跡の白波」（拾遺・哀傷・満誓）。〇かさゆひの島―所在地未詳。〇あはれ―「あは」に「泡」を響かせる。▽第四句までが「あはれ」の序。世の無常を提示する。

1072 本歌「花鳥の色をも音をもいたづらに物憂かる身は過ぐすのみなり」（後撰・夏・雅正）。▽この世を「仮の宿り」と見ると示して、以下、釈教の歌を続ける。

1073 〇あだのすさみ―無駄な慰みごと。〇たどらん―迷いながら進むのだろう。▽仏道と関わりなく過ごした年月への後悔。

1074 参考「袖の色は若紫にあらなくに心をそむる忍ぶもぢずり」（千五百番歌合・恋・隆信）。〇そむけども―出家姿になったけれども。〇かごとばかりの―申し訳程度の。〇苔の袖―墨染めの衣の袖。

1075 〇仏の国―仏が住む国。極楽浄土。「六つの道厭ふ心のむくひには仏の国にゆかざらめやは」（建礼門院右京大夫集）。▽迷妄による悟り難さ。→一七六七。

1076 夕まぐれ法の山田にひたはべて命もしかとおどろかすかな

1077 なにとなくなにとかしのぶいたづらに思ひも置かじ露の世の中

1078 見るほどもしばしなぐさむひまもがな嵐も月も常ならぬ世に

1079 世中の常なき色を知れとてや露の宿りに月もすむらん

1080 ひとり聞く暁の鐘つくづくと思寝覚ぞ夢にはありける

1081 西へ行く心の月のしるべあれどまだはれやらぬ雲ぞかなしき

1076 参考「今日過ぎぬ命もしかと驚かす入相の鐘の声ぞ悲しき」（新古今・釈教・寂然）。「みしぶつき植ゑし山田にひたはへて又袖濡らす秋は来にけり」（新古今・秋上・俊成）。○法の山田―仏道修行をする山。○ひたはへて―鳴子の綱を引き渡して。鳴子は引くと音を立てる。▽修行の中に思う命のはかなさ。以下、無常の歌が続く。

1077 本歌「なにか思ふなにとか嘆く世の中はただ朝顔の花の上の露」（新古今・釈教・清水観音）。○なにとなく―一本に「何と嘆き」。夫木抄所収歌は「なにかなげく」。○置かじ―「露」の縁語。○露の世の中―露のようにはかないこの世の中を。

1078 本歌「見るほどぞしばし慰むめぐり逢はむ月の都ははるかなれども」（源氏物語・須磨・光源氏）。○嵐も月も―「清見潟ひとり畿寝の秋の夜に月も嵐も頃ぞかなしき」（後京極殿御自歌合）。

1079 参考「奥山にひとり憂き世はさとりにき常なき色を風にながめて」（新古今・釈教・良経）。「影とめし露の宿りを思ひ出でて霜に跡とふ浅茅生の月」（新古今・冬・雅経）。

1080 本歌「つくづくと思へばかなし暁の寝覚も夢を見るにぞありける」（千載・雑中・殷富門院大輔）。参考「暮れぬなり幾日をかくて過ぎぬらむ入相の鐘のつくづくとして」（新古今・雑下・和泉式部）。○つくづくと―（鐘を）「撞く」を掛ける。

1081 参考「西へ行くしるべと思ふ月影の空だのめこそかひなかりけれ」（新古今・釈教・待賢門院堀河）。○心の月―悟りへの志向を指す。○まだはれやらぬ雲―煩悩。参考「夕立のまだ晴れやらぬ雲間より同じ空とも見えぬ月かな」（千載・夏・俊恵）。

1082 ともし火のつくるを際に置きゐつゝこの世を夢と悟りゆく哉

1083 をろかなる心のうちをたづねみよほかに仏の道はなけれど

1084 厭ふなよ苦しき海による波もみのりの水のほかにやは立つる

1085 思ひとけばこゝろにつくるむろの道を厭ふぞやがて惑ひなりける

1086 あきらけき道にもやがて悟りいらんまだふかき夜の夢のゆく末

1087 入る月に扇をあげてたとふれどうき世の闇ぞかこつかたなき

1082 本歌「ともし火のつくるを際に眺めつつまどろまぬ夜を幾夜経ぬらむ」（物語二百番歌合・心高き）。参考「秋夜長　夜長無眠天不明　耿耿残灯背壁影　蕭蕭暗雨打窓声」（和漢朗詠・秋夜、白氏文集・上陽白髪人）。○際に―壁際に。○置き―「起き」を掛ける。

1083 参考「よそになど仏の道を尋ぬらんわが心こそしるべなりけれ」（詞花・雑下・忠通）。○ほかに―心のうち以外に。

1084 ○苦しき海―苦海・生死輪廻の際限ない苦しみに満ちた世界。「立ち帰り苦しき海に置く網も深きえにこそ心引くらめ」（新古今・釈教・寂蓮）。○みのりの水―法水。衆生の煩悩を洗い落として清浄にするもの。仏法。

1085 参考「わが願む七の社の夕だすきかけても六の道にかへすな」（新古今・神祇・慈円）。○むろ―「むつ」の誤写。「むつの道」は、仏教で言う、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道。○やがて―それがそのまま。

1086 参考「岩代の神は知るらむしるべせよ願む憂き世の夢の行末」（新古今・神祇・読人不知）。○まだふかき夜の夢―迷える夢。「静かなる暁ごとに見渡せばまだ深き夜の夢ぞかなしき」（新古今・釈教・式子内親王）。

1087 参考「月隠重山今　撃扇喩之」（和漢朗詠・仏事・智者大師）。「かりそめのうき世の闇をかき分けてうらやましくも出づる月かな」（詞花・雑下・匡房）。▽月を悟りの象徴として仰ごうとしてもかなわず、迷蒙を脱し得ない苦しみ。

1088 空にこふ身のをこたりのつれなさを嘆き〳〵のはてを知らばや

1089 諸神を頼みしかひぞなかりける井出のしがらみ手にはくまねど

1090 いにしへのなげきの森の名もつらしわがねぎごとの神の瑞垣

1091 神風やとよさかのぼる朝日かげくもりはてぬる身を嘆きつゝ

1092 あはれ知れ神の恵みは知らねども伊勢までなをもかくる頼みは

1093 折りしかん旅寝もつらし波枕名はむつましき伊勢の浜荻

1094 思ひ出づる袖にぞかげは宿りけるその神山の有明の月

1088 参考「さりとも嘆き嘆きて過ぐしつる年も今宵に暮れはてにけり」（千載・冬・公光）。「恋ひ死なぬ身のおこたりぞ年経ぬるあらば逢ふ夜の心強さに」（拾遺愚草・建保五年四月庚申御会・久恋、新勅撰・恋二）。○こふ―祈り願う。○身のをこたりのつれなさ―我が身の怠慢による加護のなさ。

1089 参考「諸神の心に今ぞかなふらし君を入千世と祈るよごとは」（千載・神祇・季経（元暦元年大嘗会歌））。「山城の井手の玉水手に汲みて頼みしかひもなき世なりけり」（新古今・恋五・読人不知）。○諸神―多くの神々。○井手―山城国の歌枕。「漏らさばや思ふ心をさてのみはえぞ山城の井手のしがらみ」（新古今・恋二・殷富門院大輔）。▽自らが即位した折の歌を踏まえ、神の加護のなさを思い知る。以下、神に対する歌が続く。

1090 本歌「ねぎごとをさのみ聞きけむ社こそはてはなげきの森となるらめ」（古今・雑体・讃岐）。○なげきの森―嘆きという木からなる森。歌枕。所在地は大隅国他の説あり。○瑞垣―神社の周囲の神聖な垣。（ねぎごとの）「満つ」を掛ける。

1091 本歌「曇りなくとよさかのぼる朝日には君ぞつかへん万代までに」（金葉・賀・俊頼）。○神風や―「伊勢」の枕詞。ここは伊勢神宮を指す。○とよさかのぼる―美しく輝きながらのぼる。▽加護を得られず苦境にある身の嘆きを伊勢の神に訴える。

1092 参考「鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず伊勢まで誰か思ひおこせむ」（源氏物語・賢木・六条御息所）。○伊勢―伊勢神宮を指す。▽神の意思にかかわらず、伊勢に思いを寄せる姿勢を示す。

1093 参考「神風は伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に」（新古今・羇旅・読人不知）。○波枕―波のほとりに拾ひけむ名はむつましきかざしなれども」（源氏物語・若菜上・柏木）。▽前二歌に続き、伊勢にまつわる詠を置く。

1094 参考「時鳥その神山の旅枕ほのかたらひし空ぞ忘れぬ」（新古今・雑上・式子内親王）。○宿りける―涙に映っている。○その神山―七〇四。▽賀茂の神に向かう思い。

1095 本歌「住吉の岸ならねども人知れぬ心のうちのまつぞわびしき」（後拾遺・恋三・相模）。○住吉の神―住吉明神。○しるし―霊験。○まつ―住吉社に有名な「松」に「待つ」を掛ける。▽住吉の神に向かう思い。

1096 参考「もろ人の願ひを御津の浜風に心涼しき四手の音かな」（新古今・神祇・慈円）。「神風や山田の原の榊葉に心のしめをかけぬ日ぞなき」（新古今・神祇・越前）。○天くだる―天から降臨した。○御津の浜―琵琶湖岸。近江国の歌枕。「御」に「見」を掛ける。○心のしめをかけて―心全体からひたすら。「心をかけて」に「注連」（縄）をかけて」を言い掛ける。「しめ」には（心を）「占め」を掛ける。▽日吉の神に向かう思い。

1097 参考「世をそむく山の南の松風に苦の衣や夜寒なるらむ」（新古今・雑中・安法）。○山の南―紀伊国の熊野。↓一七四一。▽熊野の神に向かう思い。

1098 参考「岩代の野中に立てる結び松心もとけず昔思へば」（拾遺・恋四・人麻呂、万葉・巻二）。○岩代―紀伊国の歌枕。（いかが）「言は（む）」を掛ける。▽有間皇子の事件を踏まえ、幸福を予祝する結び松の行為が空しくなったことに思いをはせる。

1099 参考「暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」（拾遺・哀傷・和泉式部）。「従冥入於冥、永不聞仏名」（法華経・化城喩品）。○みのりの花―法華経。▽仏法に対する切実な願いをもって作品のとじめとする。

1095 住吉の神のしるしと頼めども心のうちのまつは年へぬ

1096 天くだる神もあはれと御津の浜心のしめをかけて頼めば

1097 かはらじと頼みし物をあしひきの山の南の松風の声

1098 頼みこししるしもいかゞ岩代の野中の松に結ぶ恨みを

1099 我頼むみのりの花のひかりあらばくらきに入らぬ道しるべせよ

〔拙著『後鳥羽院御集』（和歌文学大系24、平成九年六月、明治書院）による。〕